

56. 節分の日地域の高齢者宅など約1500軒へ 鬼が福を届ける行事

グループ名	アテラーノ旭
代表者	山中 雅子

① 活動の目的

地域の高齢化が進むと同時に高齢者が引きこもりがちになり、地域とのつながりが希薄になってきています。そこで考えたのが、節分の日小さな福を入れた袋を「〇〇さんち福は内！」と声をかけながら、赤鬼と青鬼が太鼓を鳴らしながら訪ねて回ることです。今年で6年になりました。袋の中にはメッセージも入っていて「街中がみんな友達福来る」「お互いさまと支え合い」「みんな健康福来る」などと書いてあります。

地域の絆を深め、支え合いのまちづくりを目的として毎年取り組み、地域の人に喜ばれています。

② 活動概要

高知市の西部に位置する旭地区は戦災を免れた地域で、道幅も狭く木造建築物の多い昭和の時代を思わせる町並みの残る地域です。

昭和50年代より地場産業も衰退し、多くの若者が仕事を求め県外に流出し、高知市内でも最も高齢化が進んでいる地域です。

そうした状況の中で、地域との繋がりも希薄になりつつあることを憂慮し、地域のメンバー13名で、2007年5月に“まちのお茶の間”「アテラーノ旭」を立ち上げました。“アテラーノ”とは土佐弁で“わたしたちの”という意味をカタカナ文字で表現した言葉です。

地域の誰もが来てお茶や食事をしたり、趣味や特技を生かしたものの展示や販売のコーナーも設けています。地域交流の場として毎日たくさんの人たちが出入りしています。

2009年から高齢者向けの配食事業や介護保険制度に含まれない分野での生活支援も行なうようになり、地域の人々の“猫の手”になろうと日々努力しています。

その他、季節折々のたくさんのイベントにも取り組んできました。その取り組みの一つとして、2月3日の節分の日鬼が地域の高齢者宅や個人商店などを訪ねて「小さな福を届ける」という行事を2008年から始めました。高齢化が進み一人住まいの高齢者や老々介護の家を訪ねややもすると引きこもりがちになるのを少しでも無くし、ささやかな笑いと喜びを届けることも私たちの目的でした。

初めは、届ける先が200軒ほどでしたが、周辺からも「ぜひ、うちにも来て」という要望が回を重ねるごとに増えて今では、1500軒ほどに届けています。赤鬼・青鬼の人

数も増やし、太鼓を鳴らしながら1軒1軒訪ね「〇〇さんち福は内！」と掛け声をかけて福を届けます。袋の中には、豆やキャンディーのほか手作りのメッセージが入っています。「元気で笑顔」「みんな友達福来る」「お互いさまと助け合い」など書いた細長い短冊も入れています。届けた後、多くの家でその短冊をお札のように玄関などに貼ってくれています。

この節分の行事は、大学生、地域の包括センター、社会福祉協議会の方たちも応援に来てくれ、いくつかのグループに分かれて地域を回ります。今年は、留学生の方も鬼になって一緒に地域に福を届けました。

地域の人たちが、毎年このイベントを楽しみにしてくれていて、待っていている高齢者の方たちがだんだんと多くなっています。しかし、この節分の行事が認知され年々広がり嬉しい反面、自己資金では賄いきれなくなってきた状況でした。

今回、助成金をいただき、おかげさまで2000個の小さな福袋を届けることができました。デイケアセンターや小学校の放課後児童クラブでは、新聞紙で豆の代わりに用意して鬼を待っていているところもあり、鬼も役者がそろい新聞紙を投げられて、「やられた～」と倒れる真似をしたり、鬼が小さな福を手渡して握手して話を聞いたり、たまには子どもに「こわい～！」と泣かれたり、それぞれの場面で交流がありました。

それぞれの地域を回ったあと帰ってきて、賄いの食事をとりながら回った地域の感想を話したり、一緒に行事に参加した人たちとの交流にもなりました。

今後もこの活動を続けていける様、努力したいと思います。

③決算報告

収入	大同生命厚生事業団助成金	70,000
支出	節分用お菓子 (2,000袋分) 飴・スナック菓子	31,104
	節分用豆 10kg	8,640
	節分 鬼太鼓	2,500
	カラーコピー (メッセージ)	14,888
	節分当日ボランティアへの食事 ¥500×26人	13,000
	節分当日ボランティアへの交通費 ¥1,000×10人	10,000
	支出合計	80,132



いざ出発



地域のボランティアの人にも手伝ってもらい、みんなで協力してお菓子とメッセージを袋に詰めていきます。



鬼が回る地域をそれぞれの地域の案内役の人と決め、どのコースで回っていくか作戦会議中



地域のおうちや希望のあったデイサービス、銀行やお店、小学校にも回ります。
毎年楽しみに待っていてくれる人たちも増えています。

